



おじさんズ通信

2023年6月号 (No.31)

発行元：登別市新生町
桃柿通 緑風舎
発行者：おじさんズ3号



発行は毎月15日頃。バックナンバーは「おじさんズ」のホームページでどうぞ

アナログ
で行こう

150年前の道は、どれだ？

— 室蘭半島の里道を探して —

隣マチ・室蘭の国道36号をドライブ中、汐見トンネルを通過して、ふと思い出しました。この道を最初に切り開いたのは明治2年、幌別郡に入植した仙台藩の片倉家臣団だったことを。

「室蘭市史」や、日野愛熹の「片倉家北海道移住顛末」にも明治4年(1871年)夏、家臣とアイヌの人たちの手によって、鶯別村からトカリモイ(現在の室蘭港)まで開かれたことが、はっきりと記されています。

新たな疑問が生まれました。彼らが開削した4里余の里道のルートとは？ 資料と地図探しが始まりました。

室蘭の半分、片倉家に

角田藩・石川邦光の支配地だった室蘭郡が、両隣の巨理伊達家と片倉家の分割支配地になったのは明治3年5月のこと。角田藩の家臣らが第2次大量移住に反対したため、石川家は領主を罷免されました。

これぞ、棚からボタ餅です。現在の室蘭市幌萌・本輪西町より東・南、室蘭の大部分が、自分たちの領国に加わったことで片倉家の旧臣らが、大喜びしたこと間違いありません。稲作不適地、畑作も芳しくなく、海産物も豊かでない領地に、室蘭半島と天然の良港が加わったのですから、「これで村の産業は大発展する」と、喜び勇んで道路造りに励んだことでしょう。

「顛末記」によると、明治3年に測量を行い、翌年6月「移住者十人、アイヌ二十人を募集し、河田新太郎、大野勇治がこれを監督して、以前測量した室蘭港の里道四里二十二町を開かせた」とあります。

絵図発見！ 撮影は不可？

さて、彼らが開削した里道はどこを通ったか、郷土資料や市史などを調べた結果、室蘭市立図書館にある「胆振国室蘭郡全図」(縦約54cm 横同80cm)にそのルートが描かれているらしいことが分かり、早速見せてもらいました。

ところが、実物を前にすると「コピーも写真撮影もできません」とクギを刺され、ガ～ンです。室蘭市の有形文化財だからか。しかし、簡単にあきらめないと、デジタル×アナログ融合老人の、しぶといところ。「ならば手描きじゃ～」と、ノートにせっせと描き写しました。

で、仕上がったのが右上の“特製”絵図で、**赤点線**で強調したルートがそれです。室蘭の著名な郷土史家によると「札幌本道」(明治6年完成)以前の道のよ

うで、おそらく河田新太郎たちが通した里道はこれではないか、と推測されます。



順路を追うと、鶯別村追分→イタンキ浜→ベシボツケ(室蘭市みゆき町・潮見公園あたり)→輪西町→ボコエ(母恋)→チャシ(?)→ベエハツ(?)マクニシ(幕西町)→トカリモイ(緑町・室蘭港)となるようです。ただ、断定はできません。「当時、彼らが開いた道がどれかハッキリしていません」と、室蘭市の学芸員さんは話しています。

そして、夢は露と消えたが

開削後、「来年は本格的に道路改良を」と意気込んでいた家臣団に、冷酷非情なハンマーが振り下ろされます。この年の7月に廃藩置県、8月には華士族による北海道の分領支配が取り消されました。

河田や大野らの腸(はらわた)は煮えくりかかったか、それとも砂をかむ思いで泣き崩れたか。

歴史の一刹那に、元武士とアイヌの人々が引いた一本の道。本庄陸男の「石狩川」終章と重なる史話だけに、どうにかして書きまとめたものです。

名画複写日誌

イタリア映画「家族日誌」（日本公開1964年）をご存じでしょうか。マルチェロ・マストンヤニ、ジャック・ペラン出演の名作といわれています。

「この映画をもう一度観たい」という方がいて、あれこれ探しましたが、DVD化されていません。でも、たった1枚、家族が以前テレビで放映されたのを録画し、DVDに焼きこんだ“お宝”がでてきました。



「これ、コピーすればいいじゃん」と言ったものの、そうは問屋が卸しません。「コピーワンス機能」というのがDVDレコーダーについて

いて、一度コピーした円盤の2度目の複写は、簡単に出来ない仕掛けになっています。（解除する裏技もあるようですが）

「なら、アナログでいくべ」ということで、テレビでの再生画面をスマートフォンで動画撮りすることにしましたが、これまた一苦勞。結局、1時間54分の作品を4回に分けて撮り、無料の動画編集ソフトで連結し、USBメモリーに複製して完了。

残念ながら、最後の5分間は円盤のキズで、モザイクカクカク場面の連続からカットとなりましたが、アルビノーニのアダージョを連想させるメロディーが印象的な、兄弟愛と人間存在を描いたこの作品。やや粗雑な複写版ながら、ご所望し再鑑賞されたTさんの感想や、いかに…

四季だより

五つ葉のクローバー？

四つ葉ならぬ五つ葉クローバー？ それとも四つ葉の変種か。うちの奥さんが伊達の善光寺で見つけ、手帳に挟んで、大事にしています=写真=。

5千本に1本ともいわれる四つ葉のクローバーは、幸運をもたらすとされています。一説には十字架にも見えるためとか。

五つ葉のクローバーも、国内外で見つかっていますが、写真のそれは、変種のようなです。でも学術的に数少ない希少種だったら、どうしよう？



他人から親戚の係りに

買い物から帰ってきた奥さんに、「すごいツツジがあるよ。見に行ったら」とススメられ、近くにある大

型店へ出かけました。そして（こりゃ、見事だ。なんと今まで気づかなかった）と、カミさん同様、唸っちゃいました。



何十年も、何百回も通っているバス通りそばの草地で咲き誇

る、紫がかった鮮やかな赤色の花の森が目焼き付きます。ヨドガワツツジという品種らしいのですが、初めてお目にかかったような、それまで知らなかったことが恥ずかしいような気がしました。

「他人だった存在が、急に親せきになった」との、妻のお言葉にうなづくばかりです。

訂正

先月号の「薫風 烈風」でBIN山本氏が映像機材博物館の運営に「年金の一部をつぎ込み」とお伝えしましたが、正しくは「年金の大半をつぎ込み」の誤りでした。本人の申し出によるものです、訂正しますが、おわびはしません

薫風 烈風

▶定年まで勤めたローカル紙の、社訓めいた標語に「訂正は大胆に」というのがありました。誤りは誤りとして、ハッキリ伝えよということ。ほかにも「和をもって貴しとなす」なんていうのがあったけれど、裏を返せば「迎合」「忖度」「イエスマン」の強要とも受け取れます。今の時代、「和して同ぜず」か「議論百出こそ貴し」がよろしいようで。

▶小学校の授業に「国語」「数学」「理科」「社会」のほかに、あと一つ加えるとしたら何？ というテレビ番組がありました。秀逸回答として選ばれたのは「哲学」。皆さんなら、何と答えますか。

数十年前にあった、近隣のマチにある小学校での出来事です。カナダの姉妹都市から、親子家族が親善で訪れました。全校児童が並ぶ体育館に親子が入場したまでは良かったが、その中のサングラスをかけた小学生らしい男の子が、ガムをくちやくちや噛みながら「ハロー！」と手を挙げたのには、児童らもビックリ、ポカ〜。日本人の親なら事前に「ガム、口から出しなさい。サングラス外して」と100%、たしなめるでしょう。

どっちがいいとは言いませんが、長く続いてきた上からの知識の詰め込み一辺倒という日本式教育法、本質から考え直すときではありませんかね。

▶「今月の『薫風 烈風』は長い。さてはネタが乏しいな」と勘繰られた方、ピンポ〜です。蝦夷梅雨のせいでしょうかね。今ひとつ、エンジンが掛かりません。次号にご期待。では皆さん、お元気で〜。